

香港における日本語教育研究・日本研究の歩み

— 学術誌『日本學刊』の分析 —

A brief history of research on Japanese language education and Japanese studies:

The analysis of *Nihon Gakkan*

青山 玲二郎

『日本學刊』編集委員長

宇田川 洋子

瀬尾 匡輝

山口 悠希子

梁 凱傑

要旨

本稿では、1997 年から香港日本語教育研究会が出版する学術誌『日本學刊』全 15 号の分析から本誌が日本語教育研究・日本研究の成果をどのように発信し両分野に寄与してきたか考察する。調査の結果、創刊時からの目標である学術的な研究成果の発表、香港を中心とした研究者や現場の教師の情報発信・交換の場としての役割を十分に担い、その歴史が今も継続されていることが窺えた。今後も研究者のみならず、学習者や現場の教師を含めた議論の場としての『日本學刊』の役割を継続してほしいと願う。

キーワード：

『日本學刊』、歴史、日本語教育研究、日本研究

香港における日本語教育研究・日本研究の歩み — 学術誌『日本學刊』の分析 —

青山 玲二郎
『日本學刊』編集委員長
宇田川 洋子
瀬尾 匡輝
山口 悠希子
梁 凱傑

1. 香港における『日本學刊』

本稿では毎年一冊本研究会が発行している『日本學刊』に掲載された研究を資料として、『日本學刊』が日本語教育研究・日本研究の成果をどのように発信し両分野に寄与してきたかを分析する。『日本學刊』は1997年5月に創刊号が出版されている。香港日本語教育研究会は1986年から会員の情報交換の場として『日本語教育ニュース』という機関誌を発行していたが、1997年からはより学術的な研究成果を発表する場として『日本學刊』という名称に変更された事が創刊号序文に記されている。編集委員のあとがきなどからも、1997年7月1日の香港返還という歴史的变化に及んで、会員130人の力を結集して創刊した熱意が伝わってくる。日本學刊の創刊時から、日本語教育研究と日本研究の両方を扱った総合誌が目指され、また香港とその周辺地域の研究者が日本語、中国語、英語の3言語で研究成果を発表する場として位置づけられており、その姿勢は2012年に出版された15号まで継続されている。しかし香港日本語教育研究会が発行している点や「日本語教育ニュース」から名称変更されたことが影響しているのか、日本研究よりは日本語教育の投稿数が多く、第1号から第15号までの全投稿作品244本¹のうち日本語教育が189本、日本研究が55本となっている（参考資料A 日本語教育；参考資料B 日本研究）。

2. 『日本學刊』創刊号から15号までの流れ

本節では、各号について個別に考察する。

創刊号（1997）は、日本語教育に関する研究が11本、日本研究に関する研究が5本となっている。日本語教育に関する研究では言語政策や能力試験など香港における

1 創刊号から第15号までの全投稿作品の中から他紙から転載されたものを引いた総数である。

大きなテーマが扱われる一方、各大学や教育機関での実践報告が充実しており、香港における日本語教育の新しい分野を開拓している。一方、日本研究では文学、社会、歴史に関して比較的限定された時代や領域をテーマとしており、主に日本の研究を踏襲し深めていっている様子が窺える。また他誌からの転載文章が掲載されており、返還前の香港と日本語教育の関係などが記録されている。

2号(1998)には日本語教育・日本研究のそれぞれの分野において範囲の広い論文が投稿されており、特に共著による投稿作品が目立つ。1997年11月に香港中文大学で第3回国際日本語教育・日本研究シンポジウムが開催された事もあり、香港地域において研究者同士の連携が活発であったことが窺える。編集後記にも日本語教育・日本研究の研究者による交流の場として『日本學刊』と「シンポジウム」の関係が言及されており、この二つが香港日本語教育研究会の学术交流の場として二本柱となったようだ。

3号(1999)では全投稿作品が論文と報告の二つのカテゴリーに分けられている。活動報告では現在月例会として開催されている活動が「日本語教育セミナー」として報告されており、研究者による専門的な発表が行われている様子が記されている。

4号(2000)は、初めて「正式に『審査つき学術誌』」となり、新たなスタートを切った。一方で、会員の「研究、実践、より良い意見と情報交換の場となるよう努力」(第5号編集後記)するという編集方針から、本号では初の特別寄稿に加え、論文、実践報告、研究ノート、各国日本語教育事情報告、エッセイとカテゴリーが細分化された点が特徴的である。特別寄稿では中国における日本研究が言及されている。

5号(2001)は、編集委員長が代わったが、それまでの編集方針に則り、高水準の学術誌と会員同士の活発な交流の場を目指している。内容は日本文学に関する論文から具体的な実践報告などが掲載されている。本号から会長挨拶や香港日本語教育研究会の委員一覧が記載されるなど、研究会と会員をつなぐ役割としての『日本學刊』の役割が一層明確になったことも窺える。

6号(2002)では、計27本もの投稿が掲載された。これまでの編集方針の下、本号では大学や大学院で日本研究および日本語学を学ぶ若い人材にも広く発信の門戸を広げるため、学生・院生の研究ノートというカテゴリーが新たに設けられた。また、書評と海外学会参加報告も加えられ、最新の情報や海外の動向をいち早く会員に伝えようとする姿勢が感じられる。さらに、編集委員会には日本、台湾、韓国、中国本土の委員が加わり、「開かれた日本學刊」が明確に打ち出されている。

7号(2003)からはISSN番号を獲得し、図書館のカタログなどにより容易に検索することが可能となった。また、会員の発言の場を更に増やすという目的で「随想—

ちょっと一言」という形でのエッセイが開始され、この試みは 11 号まで続けられた（10 号には含まれず）。月例会の発表原稿が掲載されている点、他誌からの転載が復活した点も本号の特徴であろう。また論文カテゴリーでは音声、メディアに関する専門的な内容が扱われている。

8 号（2004）では、香港日本語教育研究会の副会長を長年務められた宜野座伸治先生を偲んだ特集が組まれている。論文は投稿が無かったため掲載されていないが、代わりに調査報告というセクションが設けられ、中等教育に関する様々な角度からの調査・報告がなされている。

9 号（2005）は、「香港における日本研究・日本語教育に携わっていらっしゃる方々の研究、実践の情報交換、意見交流」（第 9 号編集後記）の場としての本誌の在り方を再確認し、これまでの試みが継続されており、安定感を示している。引き続き音声に関する投稿が数多く為されており専門的な分析がなされている、また歴史や社会に関する論稿も掲載されている。

10 号（2006）は、創刊 10 周年記念号として、11 本の祝辞が寄せられたほか、韓国日本語教育研究会会長の特別論文として高校生学習者の授業モデル開発研究に関する論文も掲載されている。上記以外では、マレーシア、台湾、日本からの投稿も含め、日本研究 5 本、日本語教育 13 本となっている。日本研究分野では日系企業のマネジメントに関する詳しい論稿が掲載されている。

11 号（2007）は、オーストラリア、中国からの投稿も含め、論文、研究ノート、報告、院生ノートなどを合わせて、日本研究 4 本、日本語教育 8 本となっており、バランスよく多様な内容が網羅されていると言える。また、この年から香港日本語教育研究会が実施する教師研修に関するデータが掲載されるようになった。

12 号（2008）は、従来の論文や報告に加え、日本語教育研究会 30 周年記念号として、会長挨拶を始め、祝辞、「30 周年座談会」の報告、「30 年の歩み」などが特集されている。さらに中高生スピーチコンテストの過去の優勝者 3 名による感想文も寄せられており、『日本學刊』の前身である『日本語教育ニュース』の企画が復活した。また、過去の『日本語教育ニュース』『日本學刊』掲載目録と、1992 年から 2008 年までの月例会での発表目録があり、論文検索に役立つと同時に、研究会が幅広いテーマの研究を支援していることが窺える。

13 号（2010）は、香港日本語教育研究会が NGO として新たな組織になり 2009 年に発行できなかつた中で、様々な教育機関の研究者の協力によって再び発行された。こ

の号で香港人による中国語の投稿作品が論文のカテゴリーで掲載された。13号では「クラスの声」の項目があり、日本語教育現場の状況を垣間見られる貴重な資料となるだろう。

14号(2011)は、日本語教育の現場の視点からの社会人学習者の研究が掲載され、また中等教育に関する報告が2本提出されるなど、日本語学習者の多様性を反映している。一方投稿カテゴリーも特別寄稿を入れて7つとなり範囲の広い総花的 content となっている。

15号(2012)は、現時点での『日本學刊』の最新号である。本号の編集後記にあるように、香港の日本語教育・日本研究は、学習者数や日本語能力試験の受験者数の減少、学習者の低年齢化、新たな日本語教育・日本研究課程の開設など大きな変化の時期に入ったといえる。本号ではこれまでの『日本學刊』が培ってきた礎の下、様々な題材を扱った論文が掲載されており、急激に多様化する香港の教育・研究環境を反映していると言える。

3. まとめ

以上各号での流れを振り返ると1997年に創刊された『日本學刊』は2012年までの15年間に総計244本の投稿作品を掲載し、創刊時に目標とされた学術的な研究成果を発表する場として機能している。また、日本語教育関係の講演や活動報告を多数記録し、香港を中心とした地域の日本語教育・日本研究に関わる研究者や実践者の情報交換の場にもなっている。

使用言語は日本語教育においては主に日本語で投稿がなされているが、日本研究においては英語や中国語の投稿も数多く見られる。創刊時に日本語・中国語・英語の3言語で研究成果を発表する場として位置づけられた通りの状況が達成されていると言える。対象地域に関しては、日本語教育において95本中78本が香港を対象としており、普遍的な理論を使いながらも香港という地域に根付いた研究が、教育現場や社会状況を着実に観察して積み重ねられて来たと言える。また『日本學刊』の中心的読者である香港の会員や研究者に向けて有意義な研究成果が届けられており、その後の研究で引用されたり教室で利用されたりするなど地域の学術的・実践的發展に結びついていると言える。しかし日本研究の分野においては日本を対象とする普遍的な研究が多く香港や中国に関する研究は比較的少ない。また香港の周辺地域である東南アジアに関する研究は全く見られない。これからは香港を対象にした研究はもちろん、広東省やマカオ、東南アジア地域を対象とした日本研究が更に期待される。また第6号か

らは「学生の研究ノート」「大学院生のレポート」のような学習者からの発表を積極的に促していた。「実践報告」というカテゴリーでは、実際の教室活動で何が起こっているかを詳細に報告してきており、『日本學刊』の読者の大多数である日本語教師に実用的な役割も果たして来ていた。執筆チーム一同、今後の『日本學刊』が香港の日本語教育・日本研究の双方向的交わりの場であると同時に、さらに幅広い投稿者と読者を繋ぐ論集であり続けて欲しいと願っている。

参考資料 A：

A：日本語教育

投稿カテゴリー

特別寄稿	6
論文	35
研究ノート	34
報告	25
実践報告	20
エッセイ	6
書評	8
クラスの声	2
レポート	2
各地の日本語教育事情	1
月例会の発表原稿	8
学生・院生の研究ノート（院生の研究ノート・大学院生レポート含む）	37
特別特集（偲ぶ）	5

使用言語

日本語	173
英語	11
中国語	5

内容

比較言語学	10
理論言語学	34
応用言語学（教師、学習・教育観、教育政策、社会言語、習得など）	41
調査報告（ニーズ調査、現状把握など）	12
実践報告（紹介、提案、考察、分析含む）	74
その他（事務報告など）	18

調査・報告を対象とする地域・教育機関（把握できるもの）

香港	78
日本	5
台湾	2
中国本土	2
マカオ	2
オーストラリア	2
アメリカ	1
インド	1
シンガポール	1
マレーシア	1

調査・報告を対象とする地域・教育機関（把握できるもの）

初等教育	1
中等教育	4
高等教育	37
成人教育	4

B: 日本研究**投稿カテゴリ**

論文	20
研究ノート	21
報告	2
実践報告	3
エッセイ	2
学生・院生の研究ノート（院生の研究ノート・大学院生レポート含む）	7

使用言語

日本語	31
英語	14
中国語	10

内容

文学批評	11
歴史学	13
文化研究	12
社会学	10
教育学	3
メディア	4
経済学経営学	2

調査・報告を対象とする地域・教育機関（把握できるもの）

日本	39
香港	7
日本と中国	4
日本と香港	3
日本とアジア	1
台湾	1

C：『日本學刊』編集委員

号	編集委員長	編集委員（当時の所属）	編集技術顧問	海外編集委員
1	宮副ウォン裕子			
2	宮副ウォン裕子			
3	宮副ウォン裕子	鈴木東（香港日本語教育研究会） 石秋炯（香港日本語教育研究会） 原武道（香港大学） 村上仁（香港城市大学） 余均灼（香港中文大学） 阮亦光（香港日本語教育研究会） 梁安玉（香港城市大学）		
4	宮副ウォン裕子	鈴木東（香港日本語教育研究会） 石秋炯（香港日本語教育研究会） 原武道（香港大学） 村上仁（香港城市大学） 余均灼（香港中文大学） 阮亦光（香港日本語教育研究会） 梁安玉（香港城市大学）		
5	梁安玉	板倉ひろこ（香港理工大学） 宜野座伸治（マカオ大学） 原武道（香港大学） 何慈毅（香港科学技術大学） 宮副ウォン裕子（香港理工大学） 村上史展（香港大学） 村上仁（香港城市大学） 李活雄（香港中文大学） 石秋炯（日本語講座） 余均灼（香港中文大学） 阮亦光（日本語講座）		

6	梁安玉	宇佐美まゆみ (東京外国語大学) 干乃明 (台湾国立政治大学) 何慈毅 (香港科学技術大学) 宮崎里司 (早稲田大学) 宮副ウォン裕子 (香港理工大学) 村上史展 (香港大学) 村上仁 (香港城市大学) 李寅泳 (韓国外国語大学校) 石秋炯 (日本語講座) 譚晶華 (上海外国語大学) 余均灼 (香港中文大学) 王敏東 (銘傳大学)	阮亦光 (中文 大学校外進修 学院)	
7	梁安玉	宇佐美まゆみ (東京外国語大学) 干乃明 (台湾国立政治大学) 何慈毅 (香港科学技術大学) 宮崎里司 (早稲田大学) 宮副ウォン裕子 (香港理工大学) 村上史展 (香港大学) 村上仁 (香港城市大学) 李寅泳 (韓国外国語大学校) 石秋炯 (日本語講座) 譚晶華 (上海外国語大学) 余均灼 (香港中文大学) 王敏東 (銘傳大学)	阮亦光 (中文 大学校外進修 学院)	
8	梁安玉	宇佐美まゆみ (東京外国語大学) 干乃明 (台湾国立政治大学) 何慈毅 (南京大学) 宮崎里司 (早稲田大学) 宮副ウォン裕子 (香港理工大学) 村上史展 (香港大学) 村上仁 (香港城市大学) 李寅泳 (韓国外国語大学校) 石秋炯 (日本語講座) 譚晶華 (上海外国語大学) 余均灼 (香港中文大学) 王敏東 (銘傳大学)	阮亦光 (中文 大学校外進修 学院)	

9	宮副ウォン裕子 梁安玉	宇佐美まゆみ（東京外国語大学） 干乃明（台湾国立政治大学） 何慈毅（南京大学） 宮崎里司（早稲田大学） 村上史展（香港大学） 村上仁（香港城市大学） 李寅泳（韓国外国語大学校） 石秋炯（日本語講座） 譚晶華（上海外国語大学） 余均灼（香港中文大学） 王敏東（銘傳大学）	阮亦光（中文 大学校外進修 学院）	
10	宮副ウォン裕子 （香港理工大 学） 梁安玉（香港 城市大学）	宇佐美まゆみ（東京外国語大学） 干乃明（台湾国立政治大学） 何慈毅（南京大学） 宮崎里司（早稲田大学） 村上史展（香港大学） 村上仁（香港城市大学） 李寅泳（韓国外国語大学校） 石秋炯（日本語講座） 譚晶華（上海外国語大学） 余均灼（香港中文大学） 王敏東（銘傳大学）	阮亦光（中文 大学校外進修 学院）	
11	宮副ウォン裕子 （香港理工大 学） 梁安玉（香港 城市大学）	宇佐美まゆみ（東京外国語大学） 干乃明（台湾国立政治大学） 何慈毅（南京大学） 宮崎里司（早稲田大学） 村上史展（香港大学） 村上仁（香港城市大学） 李寅泳（韓国外国語大学校） 石秋炯（日本語講座） 譚晶華（上海外国語大学） 余均灼（香港中文大学） 王敏東（銘傳大学）	阮亦光（中文 大学校外進修 学院）	
12	何志明（香港 中文大学）	村上史展（香港大学） 村上仁（香港城市大学） 菅井英明（香港理工大学） 上村勝雄（香港中文大学校外進修学院）	阮亦光（中文 大学校外進修 学院）	

13	菅井英明（香港理工大学）	高橋李玉香 松本真澄 建木千佳 潘文慧 龜島裕美 阮亦光		
14	青山玲二郎	高橋李玉香 方紹欣 龜島裕美 潘文慧 瀬尾匡輝 郭穎俠 木山登茂子 阮亦光		菅井英明
15	青山玲二郎	阮亦光 龜島裕美 瀬尾匡輝 方紹欣 郭穎俠 潘文慧		菅井英明